

栄養改善パートナー通信

「栄養改善パートナー通信」、いよいよ発行です。

JICAでは、2016年度より、食と栄養の改善に関わりのある農業・保健・教育・水・コミュニティ開発などの分野で派遣される専門家、ボランティア、調査団などの方々を、栄養改善のための現地活動のパートナーとして登録いただいています（4月末時点で約25名）。この「栄養改善パートナー」の皆さんへの関連情報媒体として、「栄養改善パートナー通信」を発行することとなりました。通信では、現地の活動事例のほか、食と栄養に関する基礎知識、国際的な取組みの動向などを、できるだけ現地の目線で「お役立ち情報」として伝えていきたいと考えています。

皆さんも、ぜひ一緒にこのパートナー通信を作っていきましょう！

栄養に関する国際コミットメントの流れ

- 2012年** 世界保健総会(WHA)で、母子栄養改善包括的実施計画に**栄養に関する2025年までの目標**を採択。
- 2013年** WHAで、(生活習慣病に関わる)**非感染性疾患(NCD)に関する栄養関連目標**を採択。
- 2014年** アフリカ連合(AU)総会で、**2025年までのアフリカの飢餓撲滅をうたう「マラボ宣言」**を採択。
第2回国際栄養会議(ICN2)で、「**栄養に関するローマ宣言**」と行動計画を採択。
- 2015年** 国連で、**持続可能な開発目標(SDGs)に2030年までの栄養目標**を採択。
- 2016年** 国連総会で、「**栄養のための行動の10年**」を宣言。
第6回アフリカ開発会議(TICAD VI)で「**食と栄養のアフリカ・イニシアチブ(IFNA)**」発足。

食と栄養のアフリカ・イニシアチブ(IFNA)とは？

サハラ以南アフリカで栄養不足と言われる人々の割合は、1990年代から2015年までに減少したものの、人口増加が著しいために4,200万人増えています。東・東南アジアで大きく改善した子どもの発育阻害も、依然としてアフリカでは高い水準となっています。IFNAは、アフリカにおける食と栄養の改善のための実践を加速化するため、新たな国際イニシアチブとして2016年8月の第6回アフリカ開発会議(TICAD-VI)で発足しました。2025年までの10年間に、アフリカの10~20カ国で栄養改善戦略の策定や

ロンドンからリオへ、そして東京へ栄養改善のタスキを

国連「栄養のための行動の10年」

2016年、国連総会は「栄養のための行動の10年」を採択し、栄養不良をなくすための国際的な行動が呼びかけられました。これ以前からも、10年ほど前に世界的な主要穀物の価格高騰や不足が起こったことで、食料安全保障と栄養改善への関心が高まってきました。2012年にはWHO（世界保健機関）の加盟国による総会で、母子栄養改善のための2025年までの国際目標が採択されました。2014年にはローマでFAO（国連食糧農業機関）とWHOが、第2回国際栄養会議(ICN2)を共催し、あらゆる形の栄養不良の解決に向けた行動計画に参加各国が同意しています。「栄養」を限られた一支援分野として見るのではなく、例えば農業と保健のような多分野が協働で取り組む課題としても、広く認識されてきたのではないのでしょうか。

東京オリンピックに向けて

2012年は、ロンドン五輪の年。これにあわせ、イギリスと次のリオ五輪開催国のブラジルが共催で、栄養に関する政府高官による国際イベントを行いました。翌2013年には、第1回「成長のための栄養(N4G)」サミットが開催され、総額230億ドル以上の資金拠出が200以上の国や機関により約束されました。2016年のリオデジャネイロでも、オリンピックにあわせて第2回N4Gイベントが開催され、栄養へのさらなる行動が呼びかけられました。

二つのオリンピックの流れを受け、2016年伊勢志摩サミットでも食料安全保障と栄養について議論され、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催国である日本の栄養分野におけるリーダーシップが高まっています。国際目標や行動計画を達成するには、現場で常に実践される活動も不可欠。東京五輪に向け、私たちも栄養のための行動を積み重ねていきましょう。

現場での栄養改善のアクションを盛り上げていきましょう！

分野横断的な栄養改善活動の規模拡大に取り組みます。来る5月18日・19日には、エチオピアで第1回IFNAパートナー会議を開催します。

IFNAが目指すのは、栄養改善の現場での実践です。それには「栄養改善パートナー」の皆さんの積極的な支えとアクションが不可欠です。IFNAの活動はアフリカですが、世界各国の栄養改善の実践経験を共有し、世界からアフリカへ、アフリカから世界へ、栄養改善の輪をつなぎ、広げましょう。

知っておこう:国際栄養目標

WHOの加盟国による世界保健総会（WHA）では、2025年までの国際栄養目標が以下のように採択されています。

◆ 母子栄養に関する目標

- 5歳未満児の発育障害（stunting）を40%削減する（2025年までに1億6,200万人→1億人に削減目標だが、2014年は1億5,900万人）
- 妊娠可能年齢の女性の貧血を50%削減する（2025年までに29%→15%に削減目標だが、2014年で非妊婦が29%、妊婦が38%）
- 低出生体重児を30%削減する（2025年までに15%→10%に削減目標だが、2014年で15%のまま）
- 5歳未満児の過体重を増加させない（2025年まで5.9%が目標だが、2014年で6.1%）
- 生後6カ月間の完全母乳育児率を少なくとも50%に増加させる（2012年まで38%だったのが、2014年で39%）
- 5歳未満児の消耗症（wasting）を5%未満に削減し、維持する（2012年に8%だったのが、2014年で7.5%）

◆ 非感染性疾患（NCD）に関する目標

- （成人および青少年の）肥満と糖尿病を増加させない（2010～2014年の期間に大多数の国で増加）
- 人口平均の塩分摂取量を30%削減する

全世界で見ると、これらの国際目標の達成は、2025年に向けて順調に進んでいるとは言えない状況です。日本でも、妊娠可能年齢の女性の貧血や成人の肥満と糖尿病では課題が見られます。達成状況は国によって大きな差があるのも事実です。皆さんの派遣国や活動対象地域では、いかがでしょうか。（上記データは、「2016年世界栄養報告」より）



（上）横浜市保土ヶ谷区が高齢者の低栄養予防のために示す、1日の食べ物の目安。

覚えておこう:「栄養」と「栄養素」の違い

よく「栄養のある食べ物」という言い方をしますが、もともと食べ物に含まれるのは「栄養素（nutrients）」で、栄養素を含む食べ物を消化、吸収し、発育などのように体内で利用している状態が「栄養（nutrition）」です。つまり、栄養という状態のために摂取する物質が栄養素です。

栄養は、運動、休養と並んで健康の三大要素と言われます。簡単に言えば、朝起きたら、きちんと食事をし（栄養）、日中は活動し（運動）、夜

はゆっくり休む（休養）という日々の暮らしを、それぞれの人の状態・状況に合わせて見直し、適正なものにしていくことが健康につながるということでしょう。

「私たちは自分が食べたものでできている」とはよく聞く言葉です。体に必要な「栄養素」を食べ物からバランス良く摂取し、体や心の「栄養」状態を改善することで、日々の健康を維持、強化していきたいですね。

第1号予告(2017年6月下旬発行予定)

ここは中米グアテマラ。配属先の市役所がある町から車で1時間ほど入った山村に初代協力隊員として赴任した活動の拠点、村の私設保健所。村のリーダーと村の問題解決のためのコミュニティ開発プロジェクトを計画するのが要請内容だが、村人との関係ができるまでは話し合いもできない。そこで、2カ月に1回行われる保健所の乳幼児予防接種と体重測定を手伝うことに。始めてみて気づいたことは…???

（隊員活動にまつわる栄養の課題や基礎知識を紹介します。ページは倍増予定。お楽しみに）



派遣国、業務経験国での食と栄養に関する情報やご相談をお寄せください。記事のなかで取りあげていく予定です。

<メールアドレス: rdga2-nat@jica.go.jp>